

## 基層言語、傍層言語、上層言語の概念と基層理論の適用条件<sup>1</sup>

三島 庸平

### 1. はじめに

言語接触の観点から言語変化を説明する場合、接触する言語を基層言語、傍層言語、上層言語のそれぞれの概念に従って分類し、それらの相互干渉を論じることができる。基層言語から上層言語への言語学的影響を論じるものを「基層理論」<sup>2</sup>、傍層言語同士の影響を論じるものを「傍層（言語）理論」（石原, 1994）上層言語から基層言語への影響を論じるものを「上層（言語）理論」（*ibid.*）と呼ぶ。基層言語、傍層言語、上層言語が「層」（estrato）の概念に基づいていることから、ここでは、これらを一つの説明モデルとして捉え「階層理論」（teoría “estratística”<sup>3</sup>）とする。

しかし、次の問題を指摘できる。一つ目に、接触する言語の分類を行う際、傍層言語では言語の威信、基層言語および上層言語では社会グループの社会的地位が重視される点で一貫性に欠ける。この整合性の欠如は、それぞれの用語が異なる理論として提唱されたことに起因する。二つ目に、言語変化に基層理論を適用するための条件に関して、問題となる基層言語地域から遠く離れた言語に同様の言語変化が認められることが十分に考慮されていない。

そこで本稿では、複数のロマンス語において語源の /f/ が /h/（または /ø/）になる音変化の分析（Mishima, 2020）を踏まえて、基層言語、傍層言語、上層言語の基本概念と、基層理論の適用条件について再考する。具体的には、階層理論の観点から、言語学辞書と先行研究における基層言語、傍層言語、上層言語の概念および定義を見直すことで、それらの用語に一貫性のある基本概念を提案する。次に、Ascoli (1881)、Jungemann (1955 [1952])、Craddock (1969) が提示する基層理論の適用条件を再検討し、言語変化の実現年代に着目した新しい条件を提案する。

### 2. 基層言語、傍層言語、上層言語の基本概念

**基層言語（sustrato, substratum）。**基層言語は基層理論の根幹を成すものでイタリアの言語学者 Graziadio Isaia Ascoli (1881) によって初めて使用されたが、Alvar (2006 [1986]) はその用語の曖昧さを指摘している。“*Sustrato es un término polivalente que podrá reemplazar otros o ser reemplazados por ellos*” (“El bilingüismo más claro” の部分からの引用)。

<sup>1</sup> 本稿は、2021年5月15日に開催された日本ロマンス語学会第59回大会において発表した「基層言語、傍層言語、上層言語の概念と基層理論の適用条件」に加筆修正したものである。本研究はJSPS科研費JP22K20010の助成を受けたものである。

<sup>2</sup> Cf. 阿部, 1976 ; Quilis Merín, 1999 ; Mishima, 2020.

<sup>3</sup> 「階層理論」という言い方は、González Ollé (2008) に見られる “estratística” という形容詞の使用を参考にしている。例えば、“acción estratística vasca” (p. 63) である。

基層言語に関するいくつかの言及を見ていきたい。伝統的に、基層言語の説明は「征服」の文脈で行われる。Alonso (1954 [1944]: 315) によれば、基層言語とは被征服者の言語であり、その基層言語は時代の経過とともに征服者の言語に取って代わられるものの、征服者の言語に言語学的影響を及ぼし得る。

Las poblaciones conquistadas van aprendiendo la nueva lengua, instrumento más eficaz para las nuevas formas de vida. Primero alternan su lengua patrimonial con la conquistadora; andando los siglos, pueden abandonar del todo su vieja lengua y usar como suya propia la de los conquistadores. Entonces, en la evolución que estas poblaciones conquistadas den a la lengua adquirida pueden obrar tendencias de la vieja lengua abandonada.

Lázaro Carreter (1971 [1953]) が編纂した *Diccionario de términos filológicos* (DTF) では、基層言語とは「被征服言語」のことであり、それは「征服言語」に必ず言語学的影響を残すと説明される。

Por analogía con las capas geológicas, se da este nombre a la lengua que, a consecuencia de una invasión de cualquier tipo, queda sumergida, sustituida por otra. La lengua invadida no desaparece sin dejar teñida a la invasora de algunos rasgos: palabras que sobrenadan en el hundimiento, hábitos fonéticos, de entonación, gramaticales, etc. (DTF s. v. Sustrato)

Jungemann (1955 [1952]: 17) は、スペイン語とガスコーニュ語における基層言語の影響に関する研究の中で、sustrato という語を言語と民族の両方に関連付ける。

Cuando en una comunidad gentes advenedizas, generalmente conquistadores, han introducido una nueva lengua que ha desplazado a la indígena entre la población nativa, ciertas modificaciones subsiguientes de la nueva lengua se deberán en última instancia a la perduración en ella de rasgos o hábitos característicos del idioma vernáculo presente. En tal caso, el término «sustrato» se aplica a la población y al lenguaje indígenas.

これらの説明によれば、基層言語とは、被征服者の言語（征服され社会的に低い層にいる人たちの言語）、征服者の言語に言語学的影響を及ぼした言語、征服者の言語に取って代わられるために消滅する傾向にある言語と言える。

より新しい言語学用語辞典を参照すると、*Dictionnaire de linguistique* [DL] (Dubois et al. 2002 [1994]) では、言語学的影響を与えたことが接触する言語を基層言語と分類するための基準とされる。

[T]oute langue parlée à laquelle, dans une région déterminée, une autre langue s'est

substituée pour diverses raisons, quand on considère l'influence que la langue antérieure a pu avoir sur la langue qui lui a succédé: les parlers celtiques utilisés en Gaule avant la conquête romaine sont les substrats du gallo-romain, où ils ont laissé des traces. (*DL s. v. substrat*)

*The Concise Oxford Dictionary of Linguistics [CODL]* (Matthews, 2007 [1994]) でも「影響した」ことが基層言語の定義の中で明記されている。“A language formerly spoken by some population which has influenced their acquisition of a language spoken later” (*CODL s. v. substratum*). 2015 年に出版された『最新英語学・言語学用語辞典』(中野ほか) (*s. v. substrate, substratum* (基層)) では、「征服」ではなく「支配」という用語を用いて、同じコミュニティーに二つの言語が存在する場合に「被支配層の言語」を基層言語としている。また、「上層の言語が優位となっても基層が痕跡を残すことがある」と基層言語が及ぼす言語学的影響の可能性に留めている。

基層言語は「言語学的影響を与えた」言語という定義が見られるが、言語変化において常に基層言語の影響が認められるとは限らない。一般言語学の観点からは当該の影響に関して懐疑的な意見が少なくない。Sala (1995: 36) は、イベリアロマンス諸語に基層言語の影響のみによって説明される音変化があるかどうかは定かではないと述べている。実際、ロマンス諸語における祖語ラテン語の /p, t, k/ の有声音化 (cf. 阿部, 1981) やスペイン語の /f/ > /h/ の音変化 (cf. Mishima, 2020) だけでなく、比較的新しい時代に言語接触によって生じたクレオール語の特徴 (cf. Sebba, 1997) に関しても基層言語の影響は議論されている (cf. § 3)。

したがって、基層言語は、歴史や地理、社会などの条件により「言語学的影響を与えた可能性がある」言語とすべきである。傍層言語と上層言語にも同じことが言える。加えて、基層言語を「被征服者の言語」ではなく、「社会優位性の低い言語」とすることを提案する。具体的には、接触する言語を基層言語に分類するための基準を、「被征服」といった社会グループの社会的地位ではなく、社会的必要性の観点から、少なくとも二つの言語が存在するコミュニティーにおける言語の社会的な優先度に改めるのである。なぜならば、次の「上層言語」の例で見ると、社会グループの社会的地位と言語の社会優位性は常に一致するとは限らないからである。

**上層言語 (superestrato, superstratum)**。上層言語は 1933 年に Walther von Wartburg によって初めて用いられた。基層理論では上層言語は基層言語と対になる概念として扱われるが、そうでない場合も見受けられる。Alonso (1954 [1944] : 316) によれば、superestrato は被征服者の言語構造に影響を及ぼす征服者の言語である<sup>4</sup>。その一方、*DTF* (*s. v. Superestrato*) では、征服事業をとおして別の地域から持ち込まれた言語がもたらす「現象、事象」と説明される。“Fenómeno producido por una lengua llevada a otros dominios lingüísticos en un proceso de invasión y que desaparece o no es adoptada ante la firmeza

<sup>4</sup> *CODL* (*s. v. superstratum*) でも同じような形で説明されている。“A language spoken by a dominant group which has influenced that of a population subordinate to it”.

de la lengua aborígen”. Jungemann (1955 [1952] : 18) は移民もしくは征服者に関連付け、“[u]n pueblo inmigrante o conquistador, que gradualmente adopta la lengua de su nuevo ámbito y al mismo tiempo influye en algún respecto sobre el desarrollo ulterior de esta lengua” と説明する。これらを考慮すれば<sup>5</sup>、上層言語とは被征服者の言語に言語学的影響を及ぼす征服者の言語であるが、その征服者が土着の言語を学ぶために消滅傾向にあると理解できる。

しかし、基層言語が上層言語に取って代わられることで消滅する傾向にあることを考慮すると、DTF と Jungemann (1955 [1952]) に見られる上層言語の概念は基層言語のそれと整合性がとれない。DTF に関しては、フランスおよびイタリアにおけるゲルマン語の影響を上層言語の一般的な事例として考慮していることが問題である。その事例はフランス語とイタリア語の二重母音に関するものである<sup>6</sup>。

[L]a distinción que el francés y el italiano hacen en la diptongación entre sílabas libres y trabadas es, según Wartburg, la consecuencia de un residuo que los hábitos articulatorios de los germanos dejaron en el latín al adoptar éstos la lengua del Imperio conquistado y abandonar la suya propia. (s. v. Superestrato)

このゲルマン語の事例は上層言語を定義するための一般的なケースとはいえない。時代は異なるが、ローマ人の征服事業の場合では、被征服者たちの土着言語を基層言語、征服者たちのラテン語を上層言語とみなすことが一般的である。また、先住民族は社会的な必要性からラテン語の学習を試みた一方、ローマ人は土着言語を学ばなかった。DTF と Jungemann の上層言語の説明にはこの二つの点が考慮されていない。近年に出版された『最新英語学・言語学用語辞典』(s. v. superstrate, superstratum (上層)) では、同じコミュニティに二つの言語が存在する場合、上層言語は「社会的、文化的、経済的支配層の言語」と定義される。また、同辞典では「基層言語 (substrate) に吸収されることもある」と上層言語の消滅の可能性が示唆されている。その消滅は基層理論の枠組みでは例外的なケースである (cf. Blasco Ferrer, 2010 : 2-3)。

上述のような例外が生じる原因は、基層言語と対になる概念として「上層言語＝征服者の言語＝被征服者によって学ばれ残存する言語」という等式が成り立たないからである。そこで、接触する言語を上層言語と基層言語に分類する場合、「征服者」、「被征服

---

<sup>5</sup> スペイン王立アカデミー (Real Academia Española) 編纂の *Diccionario de la lengua española* (DLE) では、adstrato, superestrato, sustrato それぞれに対して「言語」(“lengua”) とその言語がもたらす「影響」(“influencia”) の二義が明記されている。その一方、Alcaraz Varó & Martínez Linares の *Diccionario de lingüística moderna* (1997) では「影響」(“influencia”) または「現象」(“fenómeno”) のみが語義とされる。本稿では「言語」に限定する。

<sup>6</sup> DL (s. v. superstrat) でも上層言語の例としてゲルマン語が挙げられている。“Le superstrat désigne toute langue qui s’introduit largement sur l’aire d’une autre langue, mais sans s’y substituer, et qui peut disparaître finalement tout en laissant quelques traces. Après les grandes invasions, les langues germaniques ont fini par disparaître, mais elles ont exercé sur le roman une influence lexicale et syntaxique qui n’est pas négligeable”。

者」のような社会グループの社会的地位ではなく、言語の社会優位性を基準にすべきである。つまり上層言語とは、二個以上の言語が共存する一つの言語コミュニティにおいて社会的な必要性から優先される言語である。この考えを前述のゲルマン語の事例に適用すると、ラテン語は上層言語（社会優位性が高く、残存傾向にある言語）、ゲルマン語は基層言語（社会優位性が低く、消滅傾向にある言語）となる。このように言語の社会優位性を重視することで、ゲルマン語の事例を基層理論の一般的な枠組みで説明できるようになる。

ゲルマン語の事例とは異なり、社会優位性が高く元々は残存傾向にある上層言語でも社会的要因により消滅する場合がある。中世イベリア半島におけるアラビア語がその一例になりうる。

**傍層言語 (adstrato, adstratum)**。傍層言語の概念は 19 世紀前半に Marius Valkhoff によって提唱された。*DTF* (s. v. Adstrato) によれば、adstrato は当初、ある時期に同じ地域内で共存した後に隣接地域で話されるようになった二つの言語間の影響を指す語であった。“[P]ara designar el influjo entre dos lenguas que, habiendo convivido algún tiempo en un mismo territorio, luego viven en territorios vecinos”. しかし、同辞書では、単に隣接する二つの言語もしくは方言の相互干渉を指すことが多いと説明されている (cf. Alonso, 1954 [1944])。いずれも地理的な観点から二つの言語の相互干渉が論じられている。*CODL* では “[a] language which has influenced one spoken by a neighbouring population” (s. v. adstratum) とより端的に定義される。*DL* (s. v. adstrat) では、興味深いことに、「傍層」には言語もしくは方言が地理的に隣接しない場合も含まれることが指摘される。

On donne le nom d'*adstrat* à la langue ou au dialecte parlé dans une région voisine du pays où l'on parle la langue prise comme référence; l'*adstrat* peut influencer cette dernière de diverses manières. [...] Il est à noter que, de nos jours, en raison du développement des moyens de communication, la notion d'*adstrat* n'implique pas nécessairement la contiguïté géographique, mais aussi une contiguïté politique, culturelle et économique de pays parfois éloignés.

『最新英語学・言語学用語辞典』(s. v. adstrate, adstratum (隣接層)) では、社会的な側面が考慮され、ある特定の国や地域において「同等の威信を持つ言語同士」が傍層言語と説明される。

傍層言語と基層言語および上層言語では、基本概念において重視する点が異なる。基層言語および上層言語では社会グループの社会的地位、傍層言語では言語のそれが重視される。例えば『最新英語学・言語学用語辞典』では、基層言語と上層言語は「(被)支配層」の言語、傍層言語は「言語の威信」が同じである言語を指す。社会グループの社会的地位と言語の威信または社会優位性は常に一致するとは限らないため、接触する言語の干渉を論じる場合は、傍層言語だけでなく、基層言語と上層言語においても言語

の社会優位性を重視すべきだと考える。つまり、言語の社会優位性を、基層言語、傍層言語、上層言語の基本かつ共通の概念にするのである。基層言語とは「言語の社会優位性が低い言語」、傍層言語とは「言語の社会優位性が同等な言語」、上層言語とは「言語の社会優位性が高い言語」である。

この場合、adstrato に関する Alvar (2006 [1986]) の次の発言を検討したい。

El sustrato lo vemos hoy como un fósil histórico, pero un día vivió junto a la lengua que se impuso. Entonces los estudios sobre el adstrato son los primeros con los que no encontramos: hay individuos que usan una u otra lengua, según sean las circunstancias; es decir, conmutan o cambian el registro de acuerdo con sus necesidades ocasionales. (“El bilingüismo más claro” の部分からの引用).

ここで言う adstrato はローマ化の過程で生じる二言語併用と関連付けられているが、adstrato が持つ社会的な層の概念が考慮されていないように思える。我々の理解では、イベリア半島で生じたようなローマ化における二言語併用期の言語状況は「傍層」とは言えない可能性がある。なぜならば、一つのコミュニティまたは個人に先ローマ期言語とラテン語が共存するけれども、ラテン語はローマ植民社会で優先的に用いられていたからである。この場合、二言語併用期における先ローマ期言語とラテン語の関係性は基層言語と上層言語の枠組みで捉えられる (cf. Blasco Ferrer, 2010: 2-3)。

基層言語と上層言語の概念から「征服」を取り除き言語の社会優位性を重視すれば<sup>7</sup>、階層理論の分類法が様々な時代で行えるだけでなく、基層言語と上層言語の相互干渉による説明モデルの汎用性が高まると期待できる。移民や現代のイベリア半島に見られるような二言語併用は一般的に「傍層」として扱われるが (cf. 石原, 1994)、言語の社会優位性が常に同等であるとは限らない。今後の検証が必要ではあるけれども、もし二言語併用状況で言語の社会優位性に差があるのであれば、基層言語と上層言語の相互干渉を軸に言語変化を説明できる可能性がある<sup>8</sup>。

### 3. 基層理論の適用条件

ここからは、言語変化に対して基層理論を適用するための条件を再検討する。そのためにまず、基層理論を適用するための条件を体系的に示す Ascoli (1881)、Jungemann

<sup>7</sup> 基層言語と上層言語では「もともとあった言語」「後から来た言語」という「時間的な要素」が考慮される場合がある (e. g. *DLE s. v. sustrato, superestrato*)。しかし、筆者の考えでは、時間的要素をこれら2つ用語の語義とする必要はない。中世におけるイタリア北部のゲルマン語は「後から来た言語」ではあるが、前述したように基層言語として扱うことが可能である。

<sup>8</sup> Jodl (2015: 29) は、カタルーニャ地域におけるスペイン語の /l/ の軟口蓋化は間違いなくカタルーニャ語との「接触」によるものであると説明している。しかし、その「接触」が傍層であったのか、別の形であったのかは明確にされていない。

(1955 [1952])、Craddock (1969) を年代順に考察する。Craddock (1969) はこれら三つの研究の中では新しいが、彼の提案は Ascoli (1881) のものを基にしている。

Ascoli (1881 : 18-23) は、ケルト語の基層的影響を考える際、三つの条件を提示している。一つ目に、「地理的一致」“congruenza corografica”、基層言語の影響による言語変化はその基層言語の歴史的領土内でしか認められないこと。二つ目に、「内的一致」“congruenza intrinseca”、当該の言語変化が基層言語にも生じていること。三つ目に、「外的一致」“congruenza estrinseca”、当該の言語変化が同じ基層言語が想定されるすべての言語に共通していることである。

これら三つの条件に関して Craddock (1969 : 23-24) は次のように考えている。第一に、Ascoli が言う「一致」“congruenza”は基層言語の影響を論ずる上で“a minimal condition”である。第二に、問題とする基層言語の影響が及ばない地域で同じ言語変化が認められるとしても、それは重要ではない。この点については後述するが、Craddock は Pulgram (1949) の考えを支持している<sup>9</sup>。最後に、基層言語の影響は言語変化を引き起こす絶対的な要因ではない。“It suffices to assume that one language may succeed in preventing or eradicating innovation while another may not” (Craddock, 1969: 24). 阿部 (1976 : 20) は、Craddock (1969) と同じ点に言及しつつ、Ascoli が提示する条件だけでは基層言語の影響を認めることは困難であると述べている。

Jungemann (1955 [1952] : 418) は、構造言語学を考慮しつつ、ある言語変化を基層言語の影響によって生じた変化として認めるための条件として次の四点を挙げる。

1. Que existiera en la lengua de sustrato cierto rasgo o sistema con el cual el fenómeno en cuestión pueda concebirse en relación directa o indirecta, de acuerdo con principios estructurales.
2. Que el fenómeno no pueda explicarse únicamente por factores internos.
3. Que la comunidad a cuya lengua pertenece el fenómeno hubiera sido anteriormente bilingüe durante largo tiempo.
4. Que esa comunidad, durante el período de bilingüismo, hubiera estado alejada y aislada de la influencia metropolitana, o que hubiera gozado por sí misma de prestigio.

Jungemann の第一条件は、構造言語学の観点から問題とされる言語現象に直接的あるいは間接的に関係しうる特徴、システムを基層言語が有していること。Blaylock (1960 : 415) が“the only defensible starting-point for any elaboration of a substratum theory”と評するように、基層言語の影響を想定する上で最も重要な条件の一つである。第二条件は、問題の言語現象を内的要因のみで説明できないこと。基層言語の影響を認める上で決定的な条件であるけれども、基層言語の影響でしか説明できないことの証明は非常

---

<sup>9</sup> “The number of phonemes being limited, recurrence of phonemes and phoneme sequences [...], and even recurrence of typical phonological change, is to be expected” (Pulgram, 1949: 243).

に困難である。少なくとも音変化についてはそうである。Craddock (1969 : 23-24) や阿部 (1976 : 20)、Kuzmanović (2007) が指摘するように、言語変化の原因やプロセスは一樣ではなく、複数存在する場合がある。ロマンス諸語における /f/ > /h/ の変化はその一例である (Mishima, 2020)。第三条件は問題とされる言語現象が生じる言語コミュニティに長期間の二言語併用があったこと、第四条件はそのコミュニティが二言語併用のあいだ都市部から遠く離れて孤立していた、もしくはそのコミュニティ自体が社会的な影響力を有していたこと。第三と第四の条件における二言語併用への言及は Ascoli からの理論的發展と言える。Blaylock (1960 : 415) によれば、第三条件は “how long a community must remain bilingual if substratum features are to be transferred” について考えさせる一方、第四条件における都市部からの影響による言語の水平化の不在は “the most reasonable explanation” である。学習における「誤り」は世代を経ることで修正される可能性があるが (cf. 石原, 1994 : 108-109)、「正確に」学んだ外部との交流が少ない孤立した環境では修正されない場合も十分に考える。基層理論において二言語併用期は必ず想定される事柄であるが、その言語状況の不透明さは同理論の問題点として常に指摘される<sup>10</sup>。

Craddock (1969 : 28) は、Ascoli の提案を修正する形で、構造言語学と言語変化の年代を考慮した次の三つの条件を提示している。

1. *Areal Configuration*. Though the original foci of a substratum-provoked shift must lie within the historical boundaries of the substratum language, its eventual diffusion need not reflect those boundaries. The occurrence elsewhere of similar or identical shifts is not necessarily relevant to a given problem. The appearance of the shift in other languages overlying the same substratum may be an important subsidiary symptom, but reverse situation is not invariably relevant.
2. *Structural Parallelism*. The sine qua non of an application of the substratum theory is that the effects must be directly traceable to the substratum language in its interaction with the dominant languages as regards structure and diachronic development.
3. *Temporal Admissibility*. The proposed application of the substratum theory hinges on the assumption that the shift at issue dates from the period of active bilingualism.

Ascoli からの大きな変更点は、“Structural Parallelism” と “Temporal Admissibility” の導入であろう。阿部 (1976 : 21) は、「バランスの取れた音韻体系は外国語の侵入を受けにくく、逆に征服言語の構造上の弱点は特に外的影響を受けやすい」と考え、“Structural Parallelism” の導入は当然であると述べている。また “Temporal Admissibility” は、二言語

---

<sup>10</sup> 基層理論の問題について Blaylock (1960 : 414) は次のように述べている。“One weakness of most substratum explanations is that their proponents fail to state clearly what they regard as adequate conditions for the transfer of linguistic features from one speech community to another”.



併用期の言語状況と音韻変化の発生時期が基層言語の影響に関する最も積極的な証拠となりうることを考慮したものである。

Craddock の提案について三点見ていきたい。まず Craddock の提案は、同じ基層言語が想定される地域でも同一の言語変化が生じない場合もあることを認める点で、理論的な柔軟性に富んでいるといえる。スペイン語における /f/ > /h/ の音変化はバスク語またはイベリア語の基層的影響によって中世以前に生じたと説明されてきた (Menéndez Pidal, 1999 [1926])。その一方、高地アラゴンおよびナバラ地域では、バスク語が歴史的に話されていたが、その音変化は認められていない (cf. Quilis Merín, 1996, 1997)。同じ言語に同じ形で接触したとしてもその結果が異なる可能性は十分に考えられるが、なぜ結果が異なったのかを説明する必要がある。Jungemann の第四条件はその要因の一つだと考えられる。

次に、問題とされる基層言語と全く関係のない地域でも同じ変化が生じることが認められている。このことに関しては、スペイン語の /f/ > /h/ の音変化に基層説を唱えた Menéndez Pidal (1999 [1926] : § 41<sub>le</sub>) の有名な発言がある。彼によれば、類似の音声変化は様々な場所で生じうるが、地域によってその変化の原因は異なる。“[T]odo cambio fonético [*sic*] es natural y puede ocurrir en varias lenguas, pero siempre en cada una ocurre por precisas causas históricas distintas determinantes; cambios lingüísticos semejantes han de tener en distintos países causas históricas distintas”. ただし、Menéndez Pidal の言う「歴史的な原因」“causas históricas” が外的要因のみを指すのであれば、必ずしもそれだけで言語変化が生じるわけでない (Jungemann の提案についての考察を参照されたい)。基層理論に懐疑的であった Elcock (1990 [1953-55] : 227) は、ピレネー地方の諸言語を例に、ある言語特有とされる音変化も全く系統の異なる言語に生じていることを指摘する。“[C]asi todos los cambios de sonido que se pueden considerar típicos en los idiomas pirenaicos se encuentran en otras hablas románicas, donde la base étnica no es la misma, e incluso en otras lenguas de origen totalmente diferente”. Sala (1995 : 36) によれば、イベリアロマンス諸語の音変化の多くは基層言語の影響が原因とされてきたけれども、同時にそれらすべての音変化が内的要因によっても説明されていることを強調しなければならない。同じ言語変化が外的・内的要因どちらでも実現するのであれば、これまでの考察をとおして次のような考えに至る。特定の音変化に基層言語の影響を想定する場合、内的要因によってそれが生じないこと (Jungemann の第二条件)、基層言語の影響が内的要因よりも優先されたことをどのように立証することができるのだろうか。こうした問題について Jungemann (1955 [1952] : 418) は、決定的な証拠が不在の場合、新しいデータや言語に関する知識が深まるまで仮説の検証を保留する必要があると考えている。

[S]i no hay testimonio claro de bilingüismo prolongado o de que otras circunstancias favorables hubieran prevalecido, o si resulta que el fenómeno puede *también* explicarse como producto de sólo factores internos, difícilmente se justifica cualquier afirmación, sino que

debemos reservar nuestra opinión hasta que ya datos nuevos, ya un conocimiento mayor de cómo funcionan y cambian las lenguas, inclinen definitivamente la balanza a un lado o a otro.

最後に、別の地域に同じ言語変化が存在することは全く重要ではないと Craddock は述べているけれども、そのことは明らかに重要視すべき点である。なぜならば、基層言語の影響による変化と内的要因による変化は異なる形で生じる可能性があるからである。複数の同系統の言語が同じ言語変化を共有し、その変化に関して何かしらの差異があるのであれば、その差異が変化の原因の違いに起因する可能性があると考えられる。別の言い方をすれば、ある変化に対して基層言語の影響が想定される言語とそうでない言語の間にどのような共通点と相違点があるのか (cf. Mishima, 2021)。特筆すべき差異が存在しないのであれば、言語変化の説明として基層理論を支持するかどうかは恣意的なものになりうる。

Ascoli、Jungemann、Craddock が示す条件は、言語変化における基層言語の影響を決定付けるものではなく、仮説として当該の影響の可能性を示すものである。過去の言語接触に関して決定的な証拠を提示することが極めて困難ではあることは言うに及ばない。

しかし筆者は、基層言語の影響を検証する方法の一つとして、複数の同系統の言語に同じ言語変化が共有される場合、推定されるその変化の実現年代に着目することを提案する。例えば、複数のロマンス語に同じ変化が異なる時代に生じているのであれば、そこに基層言語の影響を検討する余地がある。なぜならば、基層言語の影響は言語変化の実現を決定づけたり、早めたりするからである。その可能性は Jungemann や Elcock、阿部によって示唆されている。

Queda excluida la explicación sustratista para las transformaciones que se inician después de la desaparición de la lengua de sustrato. Para esclarecer también modificaciones de este último tipo por medio de la teoría del sustrato, algunos pocos lingüistas han sugerido otro tipo de acción del sustrato: las «tendencias» hereditarias que persisten entre los habitantes indígenas de una región determinada. (Jungemann, 1955 [1952]: 19)

[T]he Latin nature of the phenomenon is, to our mind, undeniable, but that the absence of *f* in the local speech should have favoured the adoption of Latin forms with *h* seems well within the bounds of linguistic probability. In this view, the effect of the substratum was to determine a choice rather than to initiate a change. (Elcock, 1960: 425)<sup>11</sup>

言語内には基層の作用がなくても音韻変化傾向が存在しているからには、基層はせいぜいその内的変化を活発にしたり、或いは早めたりするような a “trigger”

---

<sup>11</sup> Siegel (2011) はクレオール語の研究をとおしてこの基層言語の影響に言及している。

effect しか持たないように思える。(阿部, 1976: 31)

つまり、ある言語変化が複数の同系統の言語で共有される場合、それぞれの言語にその変化が異なる時代に生じていることが基層理論を適用するための条件の一つになりうる。変化の実現年代の差異が常に基層言語の影響に起因するとは限らないので、その差異が基層言語の影響でしか説明できないかどうかを検討する必要がある。Mishima (2020, 2021) では、こうした考えを基にして、基層理論の妥当性が議論されるスペイン語の /f/ > /h/ の変化に取り組んだ。その概要を以下に記す。

#### 4. ロマンズ諸語における /f/ > /h/ の変化

ラテン語の /f/ に関して、ロマンス諸語ではその /f/ の保持と同時に、/b, v/ や /h, ø/ への変化が認められる。/f/ の有声音化は西ロマンス諸語に広く見られる一方、/f/ の非口腔音化と後の音価消失は地理的に離れた地域に生じている。/f/ > /h/ が認められるロマンス諸語は、スペイン語、ガスコーニュ語、イタリア語諸方言、サルデーニャ語諸方言、ルーマニア語諸方言である<sup>12</sup> (Mishima, 2020 および印刷中 a)。祖語ラテン語の /f/ が一部のロマンス諸語で /h/ に変化した原因については大きく分けて二つの説がある。基層理論による説明と、外的要因に依拠せず音声音韻論のみに立脚する説明である<sup>13</sup>。スペイン語とガスコーニュ語では /f/ > /h/ の変化の説明として基層理論が広く受け入れられているが、今なお議論されている。その理由は、基層言語の影響を示す決定的な証拠の提示が困難であることに加えて、ほかのロマンス諸語にも同じ変化が認められるために音声音韻論による説明も一定の支持を集めているからである。スペイン語とガスコーニュ語以外のロマンス諸語では音声音韻論による説明が一般的であるが、サルデーニャ諸方言では基層理論による説明も提唱されている (Blasco Ferrer, 2010 ; Gouvert, 2016)<sup>14</sup>。

上述したように /f/ > /h/ の変化は複数のロマンス諸語に認められるが、スペイン語の事例が集中的に研究されている。従来の比較研究は、スペイン語をイベリア半島の近隣言語と通時的・共時的に比較したものが多い。そうした研究では、/f/ > /h/ の変化の特殊性もしくは稀有性を理由に基層理論が支持される (cf. Quilis Merín, 1996, 1997, 1999, 2020)。その一方、当該の変化が認められるイベリア半島外のロマンス諸語との比較で

<sup>12</sup> Menéndez Pidal (1999 [1926]: § 41<sub>6c</sub>) は自身の基層説の中でスペイン語・バスク語・ガスコーニュ語の地理的連続性を強調している。これについては Igartua (2011) と Mishima (2020: 315-318) を参照されたい。

<sup>13</sup> 言語接触理論と音声音韻論を組み合わせた仮説も提唱されている (Mishima, 2020 および印刷中 b)。

<sup>14</sup> Blasco Ferrer (2010; 2015) は、基層言語を特定するための方法を提案しつつ、サルデーニャ語諸方言の /f/ > /h/ の変化に対して古バスク語の影響を想定している。Lakarra (2018: 72-73) はその可能性について否定的である。Gouvert (2016) は、サルデーニャ語諸方言の基層言語の特定は困難であるとしつつも、フェニキア語の影響の可能性があると説明している。また Gouvert (2016) は、カラブリア方言の /f/ > /h/ についてギリシャ語の古い影響に言及している。

は、同じ変化が基層言語地域外に存在することや変化の音韻的広がり類似性を根拠に、基層理論に関して否定的な意見が目立つ (e. g. Calvo de Olmo, 2012; Kuzmanović, 2007; Pensado, 1993)。しかし、イベリア半島外のロマンス諸語との比較では、すべての事例が分析対象とされていない上に、通時的な分析が不在であるため、/f/ > /h/ の変化を共有するロマンス諸語の類似点および相違点は不明なままであった。

そこで筆者は、スペイン語の /f/ > /h/ の変化における基層言語の影響の妥当性を検証するために、/f/ > /h/ の変化が認められるロマンス諸語全てを対象に、現代の方言資料と 8 世紀から 15 世紀の公証文書 (計 1871 点) を分析した (Mishima, 2020)。ここでは紙幅の都合により詳しい考察やデータは省略するが、分析の結果として、前述のロマンス諸語では /f/ > /h/ の音変化のプロセスは類似する一方、その変化が生じた時代は異なることが明らかとなった。/f/ > /h/ の実現年代は、スペイン語とガスコーニュ語では中世以前に、ルーマニア語諸方言では中世に遡り、イタリア語諸方言では中世以降にその変化が生じた可能性が高い。サルデーニャ語諸方言については、分析の対象となる地域で中世文献が不在であったが、現代の方言資料の分析から /f/ > /h/ は中世以降に生じたと考えられる (cf. Contini, 1987)。スペイン語とガスコーニュ語では /f/ > /h/ の変化が最も古い年代に生じている<sup>15</sup>。このことに関しては、スペイン語とガスコーニュ語では基層言語の影響によってその変化の実現が早められた可能性が高い。具体的には、それらの二つのロマンス諸語の原初地域において、[f] および [ɸ] を元来持たない先住民がラテン語の [f]<sup>16</sup> を [ɸ] として学んだことが主な原因である (ガスコーニュ語では祖語ラテン語の [f] が [h] に交替した可能性もある)。一方、ほかのロマンス諸語地域では [f] が正確に学ばれ、それが [h] への変化の年代を遅くしたと考えられる。ルーマニア語諸方言の変化は硬口蓋音化によって生じた可能性が高く、中間音としての [ɸ] の存在は必要不可欠ではない。想定される変化のプロセスは、スペイン語では [ɸ] > [h]、ガスコーニュ語では [ɸ] > [h] もしくは音声交替として lat. [f] > gasc. [h]、イタリア語諸方言やサルデーニャ語諸方言では [f] > [ɸ] > [h]、ルーマニア語諸方言では [f] > [fç] / [fɛ] > [xj] / [hj] (Gouvert, 2016) である。

ロマンス諸語における /f/ > /h/ の変化のプロセスが概ね類似することは音声音韻論による説明の信憑性を高めるけれども、この変化に関しては上述した変化の実現年代の差異を内的要因によって説明することは困難であると筆者は考えた。そのため、スペイン語とガスコーニュ語において /f/ > /h/ が早期に生じたことについては外的要因を想定した。分析の総合的な考察の結果として、それが基層言語の影響である可能性が非常に高いと結論づけた<sup>17</sup>。このように、比較研究の観点から /f/ > /h/ の変化の実現年代の差異に

<sup>15</sup> ガスコーニュ語の /f/ > /h/ の変化はスペイン語のそれよりも古い可能性が高い (Mishima, 2020)。

<sup>16</sup> Stuart-Smith (2004) と Gouvert (2016) によれば、ラテン語の F の発音は両唇音ではなく唇歯音であった。

<sup>17</sup> スペイン語の原初地域の基層言語はこれまでバスク語であると広く考えられてきたが、近年の研究によれば、バスク語話者は比較的遅い時期にフランス南部からイベリア半島に侵入した

着目することで、スペイン語とガスコーニュ語では基層言語の影響があったことを明らかにした (Mishima [印刷中 b] も参照されたい)。

## 5. おわりに. まとめと今後の課題

19 世紀に提唱された基層理論は言語変化の説明モデルとして広く用いられたが、20 世紀中頃からは一般言語学による説明が主流となった。近年では、クレオール語研究や (歴史) 社会言語学などの発展に伴い、言語接触による言語変化の可能性が再び注目されている<sup>18</sup>。そこで本稿では、ロマンス言語学を基盤に、接触する言語を基層言語、傍層言語、上層言語に分類するための基本概念と、言語変化を基層理論で説明するための条件を再検討した。

基層言語、傍層言語、上層言語は共通に「層」を基にした考えであるが、それぞれ異なる形で提唱され、一貫性が欠如していた。そこで、それらを階層理論という一つの説明モデルとして捉えつつ、次のことを提案した。接触する言語を基層言語、傍層言語、上層言語に分類する場合、社会グループの社会的地位ではなく、言語の社会優位性を重視する。また、接触する言語に言語学的影响を及ぼしたかどうかは可能性に留まる。この場合、特定の時代における社会言語学的な状況をより良く理解することが分類を行う上で重要である。地理的条件は重要なファクターであるが、傍層言語は一つの言語コミュニティに制限されない点において基層言語と上層言語とは異なる。基層言語と上層言語において言語の社会優位性を分類の基準とすることで、フランスとイタリアにおけるゲルマン語のような事例を基層理論の枠組みで説明できる。加えて、基層言語と上層言語の概念から「征服」を排除することで、階層理論の分類法が様々な時代で可能となると期待される。こうした階層理論では、すべての言語は基層言語、傍層言語、上層言語のいずれかの形で接触する言語を持ちうるけれども、その接触による言語学的影响の可能性は事例に応じて変わる。

言語変化を基層言語の影響から説明する際、その影響を想定できない地域に類似、もしくは同一の変化が認められることが問題になる。先行研究における基層理論の適用条件では、この点が十分に考慮されていなかった。ロマンス諸語のように共通の言語学的基盤を持つ複数の言語に同じ変化が生じているのであれば、地域特有の要因に言及する基層理論ではなく、一般言語学を基盤にその変化の説明を試みることは当然といえる。ここでは、基層理論の妥当性を検証する方法の一つとして、特定の言語変化を共有する複数の言語の間にある共通点と相違点を明らかにし、変化の実現年代に着目することを提案した。問題となる変化が一部の言語において基層言語の影響によって生じたのであれば、ほかの言語の変化とは実現年代が異なると考えられる。ただし、変化の実現年代

---

ことが明らかになった (cf. Abaitua & Unzueta, 2011 ; González Ollé, 2008 ; Quilis Merín, 2020)。また、カンタブリア地域の基層言語はケルトイベリア語だった可能性がある (cf. Pelarta Labrador, 2000)。

<sup>18</sup> Cf. Gouvert, 2016 ; Jodl, 2015 ; Lefebure, 2011 ; Trudgill, 2004 ; Tuten, 2003.

の差異は基層言語の影響以外でも生じる可能性があるため慎重な検討が必要である。当該の差異がない場合、基層理論による説明は極めて困難である。

これらのことを提案するにあたって本稿ではごく一部の事例しか扱うことができなかった。より一般的かつ説得力のある形で示すためには、言語接触の様々な事例に適用し、その妥当性を検証する必要がある。これについては今後の課題としたい。

#### 辞書

- Alcaraz Varó, E. & Martínez Linares, M.<sup>a</sup> A. (1997) : *Diccionario de lingüística moderna*, Editorial Ariel.
- [CODL] Matthews, P. H. (2007 [1994]) : *The Concise Oxford Dictionary of Linguistics*, 2.<sup>a</sup> ed., Oxford University Press, *online* : <<https://www.oxfordreference.com/view/10.1093/acref/9780199202720.01.0001/acref-9780199202720>> (最終閲覧日 : 2022/09/01).
- [DL] Dubois, J. *et al.* (2002 [1994]) : *Dictionnaire de linguistique*, Larousse.
- [DLE] Real Academia Española : *Diccionario de la lengua española*, 23.<sup>a</sup> ed., *online* : <<https://www.rae.es>> (最終閲覧日 : 2023/03/01)
- [DTF] Lázaro Carreter, F. (1971 [1953]) : *Diccionario de términos filológicos*, 3.<sup>a</sup> ed., Gredos.
- 中野弘三・服部義弘・小野隆啓・西原哲雄 (監) (2015) : 『最新英語学・言語学用語辞典』, 開拓社.

#### 参考文献

- Abaitua Odriozola, J. & Unzueta Portilla, M. (2011) : « Ponderación bibliográfica en historiografía lingüística. El caso de la “vasconización tardía” », *Oihenart*, 26, pp. 5-26.
- 阿部三男 (1976) : 「F > h とバスク基層説」, 『イスパニカ』, 20, pp. 18-35.
- 阿部三男 (1981) : 「イベリヤ半島における有声化とケルト語基層説について」, 『ロマンス語研究』, 13/14, pp. 70-85.
- Alonso, A. (1954 [1944]) : *Estudios lingüísticos: temas españoles*, Gredos.
- Alvar, M. (2006 [1986]) : « Cuestiones de bilingüismo y diglosia en el español », Fundación Biblioteca Virtual Miguel de Cervantes, *online* : <[http://www.cervantesvirtual.com/obra-visor/cuestiones-de-bilinguismo-y-diglosia-en-el-espaol-0/html/00effb3a-82b2-11df-acc7-002185ce6064\\_11.html#I\\_0\\_>](http://www.cervantesvirtual.com/obra-visor/cuestiones-de-bilinguismo-y-diglosia-en-el-espaol-0/html/00effb3a-82b2-11df-acc7-002185ce6064_11.html#I_0_>)> (最終閲覧日 : 2022/09/01).
- Ascoli, G. I. (1881) : *Lettere glottologiche: prima lettera*, Loescher.
- Blasco Ferrer, E. (2010) : *Paleosardo: le radici linguistiche della Sardegna neolitica*, Walter de Gruyter.
- Blasco Ferrer, E. (2015) : « Substrata Residue, Linguistic Reconstruction, and Linking: Methodological Premises, and the Case History of Paleo-Sardinian », *Вопросы ономастики*, 2, pp. 62-82.
- Blaylock, C. (1960) : « Substratum Theory Applied to Hispano-Romance », *Romance Philology*, 13, 4, pp. 414-419.
- Calvo del Olmo, F. J. (2012) : « Una frontera lingüística en las lenguas románicas: La pérdida de f- latina en castellano », *Abehache*, pp. 127-142.
- Contini, M. (1987) : *Etude de géographie phonétique et de phonétique instrumentale du sarde*, Dell'Orso.
- Craddock, J. R. (1969) : *Latin Legacy Versus Substratum Residue. The Unstressed “Derivational” Suffixes*

- in the Romance Vernaculars of the Western Mediterranean*, University of California Press.
- Elcock, W. D. (1960) : *The Romance Languages*, Faber & Faber.
- Elcock, W. D. (1990 [1953-55]) : « Sustratos fonéticos en las hablas románicas de los Pirineos » ([原題] « Substrats phonétiques dans les parlers romans des Pyrénées », [訳] Pilar García Mouton), *Archivo de Filología Aragonesa*, 44-45, pp. 227-230.
- González Ollé, F. (2008) : « Aportaciones a los orígenes de la lengua española », in Beatriz Díez Calleja (ed.) : *El primitivo romance hispánico*, Instituto Castellano y Leonés de la Lengua, pp. 13-72.
- Gouvert, X. (2016) : « Du protoitalique au prototoman: deux problèmes de reconstruction phonologique », in E. Buchi & W. Schewickard (eds.), *Dictionnaire étymologique roman (DÉRom) 2. Pratique lexicographique et réflexions théoriques*, De Gruyter, pp. 27-52.
- Igartua, I. (2011) : « Historia abreviada de la aspiración en las lenguas circumpirenaicas », in A. Sagarna et al. (eds.), *Pirinioetako hizkuntzak: oraina eta lehena: Euskaltzaindiaren XVI (Biltzarra, 2008)*, Euskaltzaindia, pp. 895-918.
- 石原忠佳 (1994) : 「イベリア半島における傍層言語理論の検証 —基層言語・上層言語との関連において—」, 『創価大学比較文化研究』, 12, pp. 107-142.
- Jodl, F. (2015) : « Estigma y auge de prestigio: El cambio f > h en castellano y gascón visto desde la sociolingüística histórica y la lingüística variacional », *Revista de Filología Románica*, 32, pp. 21-40.
- Jungemann, F. H. (1955 [1952]) : *La teoría del sustrato y los dialectos hispano-romances y gascones* ([原題] *The Substratum Theory and the Hispano-Romance and Gascon Dialects: a Functional-Structural Analysis of Some Phonological Problems*, [訳] Emilio Alarcos Llorach), Gredos.
- Jungemann, F. H. (1959) : « Structuralism and history », *Word*, 15, 3, pp. 465-484.
- Kuzmanović, A. (2007) : « Algunos fenómenos fonológicos del español a la luz de la teoría de los universales lingüísticos », in M. F. Alcaide & A. L. Serena (eds.), *Actas del V Congreso Nacional de la Asociación de Jóvenes Investigadores de Historiografía e Historia de la Lengua Española (Sevilla, 31 de marzo-2 de abril de 2005)*, Universidad de Sevilla, pp. 303-310.
- Lakarra, J. A. (2018) : « La prehistoria de la lengua vasca », in J. Gorrochategui et al. (eds.), *Historia de la lengua vasca*, Gobierno Vasco, pp. 23-244.
- Lefebure, C. (2011) : *Creoles, their Substrates, and Language Typology*, John Benjamins Publishing Company.
- Menéndez Pidal, R. (1999 [1926]) : *Orígenes del español. Estado lingüístico de la península ibérica hasta el siglo XI*, 11.<sup>a</sup> ed., Espasa-Calpe.
- Mishima, Y. (2016) : « El cambio de F- > h- en castellano: la evolución fonética y el sustrato del vasco-íbero », *Revista de Estudios Hispánicos de Kioto*, 16, pp. 138-166.
- Mishima, Y. (2020) : *El cambio de la F etimológica en oralidad y escrituralidad desde las perspectivas actuales de la lingüística románica*, Tesis doctoral, Universitat de València, 947pp.
- Mishima, Y. (2021) : « Algunos problemas sobre el cambio de la F latina desde el punto de vista de la lingüística románica », in Pilar Morales et al. (coords.), *Estudios lingüísticos de jóvenes investigadores*, Universidad de Castilla-La Mancha, pp. 131-143.
- Mishima, Y. (印刷中 a): « El contexto fonológico del mantenimiento de la F etimológica en español », *Revista de Historia de la Lengua Española*.
- Mishima, Y. (印刷中 b): « Una nueva perspectiva actualizada sobre el cambio de F > /h/ a partir de la lingüística románica histórica », *Actas del XII Congreso Internacional de Historia de la Lengua*

*Española.*

- Pensado, C. (1993) : « Sobre el contexto del cambio F > h en castellano », *Romance Philology*, 47, pp. 147-176.
- Peralta Labrador, E. (2000) : *Los cántabros antes de Roma*, Real Academia de la Historia.
- Pulgram, E. (1949) : « Prehistory and the Italian dialects », *Language*, 25, 3, pp. 241-252.
- Quilis Merín, M. (1996) : « La F- inicial latina en los orígenes de la lengua española (I) », *Anuario del Seminario de Filología Vasca "Julio de Urquijo"*, 30, pp. 385-454.
- Quilis Merín, M. (1997) : « La F- inicial latina en los orígenes de la lengua española (II) », *Anuario del Seminario de Filología Vasca "Julio de Urquijo"*, 31, pp. 67-148.
- Quilis Merín, M. (1999) : *Orígenes históricos de la lengua española*, Universitat de València.
- Quilis Merín, M. (2020) : « De los Orígenes a la protohistoria del español: algunas valoraciones sobre la evolución f > h », in E. Bustos Gisbert & R. Cano Aguilar (coords.), *Noventa años de Orígenes del español*, Tirant Humanidades, pp. 161-178.
- Sala, M. (1995) : « Lenguas en contacto en el ámbito hispánico », in P. Odber de Baubeta (ed.), *Actas del XII Congreso de la Asociación Internacional de Hispanistas (Birmingham, 21-26 de agosto de 1995)*, University of Birmingham, pp. 27-40.
- Sebba, M. (1997) : *Contact Language: Pidgins and Creoles*, Macmillan Press.
- Siegel, J. (2011) : « Substrate reinforcement and the retention of Pan-Pacific Pidgin features in modern contact varieties », in C. Lefebvre, *Creoles, their Substrates, and Language Typology*, John Benjamins Publishing Company, pp. 531-556.
- Stuart-Smith, J. (2004) : *Phonetics and Philology: Sound Change in Italic*, Oxford University Press.
- Trudgill, P. (2004) : *New-Dialect Formation. The Inevitability of Colonial Englishes*, Edinburgh University Press.
- Tuten, D. (2003) : *Koineization in Medieval Spanish*, De Gruyter.

(みしま ようへい / 琉球大学)